

中村高女「記念誌」を発刊して<sup>(※1)</sup>馬城会副会長 第19回卒 高橋 ミヨ子<sup>(※2)</sup>

旧実践女学校を初めとする、2千6百余人の卒業生のみなさんお元気のこととおよろこび申し上げます。とっぴり相馬につかっている私なのに馬城会第二部の仕事を助けて下さった、各学年の理事の方々には、記念誌完成について深く感謝申し上げます。

ふるさととは遠きにありて想うもの……という詩にあるように、遠く離れてお暮しの方々にとっては、殊更の思いでご覧いただいたのではないのでしょうか。

一冊の名簿を頼りに、昭和58年2月6日やっとならちの総会を開くことができましたとき、旧校舎跡にある共同福祉施設の会場に伏見<sup>(※3)</sup>・松田<sup>(※4)</sup>両先生を始め十数名の先生方を迎え百名の会員が一堂に会した感激は、大変なものでございました。これまで資金のないこの会に寄せていただいた先生方や、各先輩からのご厚情で灯を消さずに盛りあげて来たのでした。

続いて平成元年9月10日旧校舎跡に記念碑を建ててくださり、長谷川キエ<sup>(※5)</sup>・松田シズエ両先生にお出いただき、橋本<sup>(※6)</sup>副会長・桜井<sup>(※7)</sup>相馬支部長に除幕をしていただきました。先輩の雫石<sup>(※8)</sup>さんに乾杯の音頭をとってもらい、森<sup>(※9)</sup>、青葉<sup>(※10)</sup>先生や、東京からかけつけて下さった片桐<sup>(※11)</sup>先生といっしょに、卒業生のきずなを強くし、心のふるさとが点となって実現したのでした。

平成2年記念誌発行の話が出た頃、小説家林真理子先生の「本を読む女」の主人公が、旧実践女学校時代の清水みよ治先生だったことがわかり、先生に連絡がとれましたので、一段と光彩を添えていただきましたことを申し添えます。

記念誌第一号は相馬支部長はじめ、多くの方々のご尽力で誕生いたしました。特に終始編集、校正にお力添えいただきました佐藤慶一<sup>(※12)</sup>先生には心から感謝申し上げます。

同窓生の皆さんから、「私もこの人と同じだった。」と共感いただけましたら幸せです。又、第二号の続刊に向けてご投稿下さい。同窓生のことを心から心配して下さった先生方や、同窓生の皆さんに早くお見せ出来なかったことが心残りです。歲月人を待たずの感が深いです。記念誌をご霊前にお供え申し上げます。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第三部 第二章 馬城会の歴史」より。

(※2) 旧姓 荒(ミヨ)。中村出身。昭和17(1942)年卒。職業(研究)。

(※3) 伏見忠龜(ただひさ)。日立木出身。相中第18回、大正9(1920)年卒。師範。

(※4) 松田 一。中村出身。相中第19回、大正10(1921)年卒。法大。相中教諭：昭和7(1932)年～昭和16年、国語。

中村高等女学校教諭・校長：昭和16年～昭和23年。相高教諭：昭和25(1950)～昭和33年、等。

(※5) 長谷川キヨ？

(※6) 橋本正一。駒ヶ嶺出身。相中第25回、昭和2(1927)年卒。師範。第7代馬城会長：平成4(1992)年～平成7年。

(※7) 桜井弘佑。旧姓早川。中村出身。相中第40回、昭和17(1942)年卒。盛岡工専。

(※8) 雫石イホ。中村出身。中村高女第10回、昭和8(1933)年卒。一ツ橋共立女専。

(※9) 森佐エ門。新地出身。相中第24回、大正15(1926)年卒。福島師範二部。

(※10) 青葉里代。 (※11) 片桐恵依子。 (※12) 大野出身。相中第25回、昭和2(1927)年卒。師範。

## 第二の故郷<sup>(※1)</sup>

恩師 林 みよ治<sup>(※2)</sup>

突然お手紙さしあげます。私は林真理子の母親です。真理子が講演旅行など、ここ数日多忙のため失礼して、とりあえず私にご返事するようにと、本日速達で貴女様のお手紙がまわって参りました。

ご趣旨はよくわかりましたが、どうして私と真理子の関係がおわかりになったのでしょうか。ご書面中の相馬の松岡先生とは、どなたでしょうか。あの本を読まれた方が、お気付になって下さったのでしょうか。不思議な出会いというものが感じられて仕方がありません。

と申しますのは、実は私が相馬にいただいている懐かしさは、今も少しも変わるものではなく、今このような形で第二の故郷とも思っております相馬の、思い出の糸がつながることは、夢のようでございますから。

3年ほど前、母校のクラス会を相馬市で、病院長の御息様をお持ちで自身も、吟舞の先生でいらっしゃる柏村登記子様が、幹事として松川浦の「はやしや」に一泊で開催して下さいました。大喜びで参加させていただき、なつかしい町並や観音様を見学させていただいたのです。お城の本丸あたりは、余り変わっていないようでしたが、青年学校のあった辺は、どのようになってしまっていたのでしょうか。ゆっくりできなくて残念でした。

くわしい年代等はゆっくり調べないとはっきりしませんが、仰せの通り昭和10年頃、2年か3年位お世話になったと思います。校長先生は荻宿<sup>(※3)</sup>先生、教頭先生が伏見忠龜先生でした。

探せば、卒業アルバムもあるはずですので、お送りすれば当時の職員生徒も、おわかりになると思いますのでお送りします。私の旧姓は清水で、旧姓草野トミ<sup>(※4)</sup>先生とは特に親しくしていただき、なつかしくご住所知りたいと思っておりましたから、さっそくおたより致します。

このような記念事業は、先に立つ方の多大な努力がなくては、成功できない大切なお仕事と存じます。記念誌のメ切は、まだ時間もありますようですので、娘と相談の上、なるべくご希望にそうようにしたいと思っております。色々書きたいことがあるようですが、突然のことにて言葉のたりない心地が致します。

9月21日

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第三部 第二章 馬城会の歴史」より。

(※2) 旧姓 清水。

(※3) 荻宿 諭。

(※4) 草野トミ⇒遠藤トミ

# 昭和十八年女子挺身隊 (※1)

## 第19回卒 志賀 ヨシ子 (※2)

私達の職業学校時代は、第一は『勤労奉仕』第二が勉強だった。戦争中なのでいつ空襲警報があっても良いように準備をしておいた。そのために学校で決められた係もあり、私は『非常持出し係』だった。空襲警報のサイレンが鳴り、自宅（立谷町）からはだして学校に走ったこともあった。何時もなら歩いて1時間10分はかかるところを45分で着いたものだ。

勤労奉仕には農作業が殆どで、稲刈で岩の子に行った時は、田はぬかり膝の上までどろどろになり、寒くてふるえながら家に帰ったこともある。

間もなく大東亜戦争が始まり、「挺身隊に行ってください。」と、恩師から言われたのは昭和18年の学校を卒業しようとしていた頃 (※3) だった。当時、私は5人兄弟の長女で女は私一人だった。その為両親は家事と農作業の手伝いとして私を頼っていたので、挺身隊に参加することに反対だった。

とうとう4月の末、川崎の富士電機に入社することになった。川崎工場の工員は7千人だった。私の職場は『灯器課指令係』の事務を担当し、職場は50人の男子の中で女子は僅か4人だ。また会社の近くに鶴見のガスタンク群があり、米軍の偵察機の恰好の標的であったため、常に危険と隣り合わせで不安な日々だった。

寮は会社から歩いて10分の所で、私の部屋は2階で日当りの良い6畳間で二人の生活だった。寮での食事は食糧事情も悪くなったせいか、とても食べられるようなものではなく、豆粕・大根・さつまいもの茎等で、初めのうちは慣れなかったが、空腹を満たすのに食べた。夜は工員の作業衣の修繕などを消灯時間までお手伝いしたものである。

日曜日になると、武蔵中原に勤労奉仕に行った。そこでは白米のご飯が頂けた。帰りにはお土産としておむすびや芋等をいただいて帰るので、夜になると、寮生達と分け合って楽しみながら食べたものだ。

時々実家から送られて来る“いり豆”や“柿の皮”等はとても嬉しかった。ある時このおいしいいり豆を、竹ごおりの中に入れ大事に押し入れにしまっておいたものを食べようとして中を取り出したら、全部ネズミに食べられてしまい大変くやしい思いをしたこともある。

昭和20年から戦後激動の50年を生きて来て、物を大事にする気持ちは家族の中に語り継いでいこうと思っている。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 但野。日立木出身。昭和17(1942)年卒。

(※3) 「昭和18年の学校を卒業しようとしていた頃」の記述がある。馬城会員名簿の卒業年は「昭和17年」となっているが、本科2年卒業後、研究科1年を卒業したのが昭和18年と考えられる。